

蟬谷めぐ実／咲くやこの花インタビューvol.48

蟬谷めぐ実(せみたに・めぐみ)【令和6年度 文芸その他部門[小説]】



文化文政時代の世界を生き生きと立ち上げる 時代小説の若きホープのこれまでとこれから

2020年、江戸の歌舞伎を題材にミステリーの趣向を交えて描いた時代小説『化け者心中』で第11回小説野性時代新人賞を受賞と、鮮烈なデビューを飾って以来、同作で第10回日本歴史時代作家協会賞新人賞、第27回中山義秀文学賞を受賞。2022年刊行の『おんなの女房』で第10回野村胡堂文学賞、第44回吉川英治文学新人賞を受賞。2024年刊行『万両役者の扇』では第15回山田風太郎賞を受賞するなど、わずか数年の間に数々の文学賞を受賞した蟬谷めぐ実さん。

「文化文政期の江戸の芝居小屋と界限を舞台に、芸の魔力に取りつかれた歌舞伎役者の業、芝居を愛する人々の喜怒哀楽を、当時の風俗や空気感とともに描き出す。圧倒的な創作力を誇る時代小説の新鋭として、今後さらなる飛躍が期待される」と受賞理由にあるように、これからどんな世界を描いていくのか、楽しいインタビューとなりました。

取材・文／岩本和子

三島由紀夫の美文に感銘を受け小説家に

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。まずは受賞のご感想を教えてください。

すごく光栄な賞をいただいたと思いました。賞の名前がすごくきれいで、大阪市さんが主催していることは存じておりました。私はデビュー作でも意識的に大阪の文化を盛り込んでいて、同時に大阪は自分の出身地でもあるので、受賞のお知らせを聞いたときはとても嬉しかったです。

「蟬谷めぐ美」というペンネームの由来を教えてください。

小さい頃から生き物が持つ生来のフォルムやエネルギーが好きでした。そのため、これまでもペンネームに生き物の名前を色々入れてきたのですが、蟬にした理由は、家の近くの公園で蟬取りをした記憶が強く残っていたからです。



なるほど。ありがとうございます。改めてご経歴を伺いたいのですが、高校まで大阪で、早稲田大学文学部の演劇映像コースに進学されました。まず、演劇映像コースを志望されたのは、演劇をやりたいという志があったのでしょうか？

もともと演劇が好きで、中学・高校では演劇部に入っていました。歌舞伎に関していえば、高校の古典の先生であった祖母に京都の南座などに連れていってもらっていたので、同年代の子よりも興味は強かったかもしれません。ただ、その頃からぞっこんだったわけではなくて、まわりの友達にこの特別な体験をアピールするのが嬉しただけで(笑)。ただ、子供なりに歌舞伎の異世界感は強く感じていたと思います。早稲田大学の文学部に入学した際もやっぱり歌舞伎は頭の片隅に居座っていて、それなら歌舞伎のゼミがある演劇映像コースをとということで志望しました。

小説家を志望されたのは、どういう経緯だったのでしょうか。

小説を書き始めたのは大学生になってからでした。読書自体は小さい頃から好きではあったのですが小説家を志したことはなかったです。大学生になって自由な時間が増えたことで文豪と呼ばれる小説家の本を読み始めて、中でも三島由紀夫の本を読んだときにとんでもない衝撃があって。おこがましいのですが、こんな文を自分でも産み出してみたい、そして書くからには小説家になるまで書き続けてやると決意を持って書き始めた次第です。

三島由紀夫のどこにハマったのでしょうか。

唯一無二の文体で、ただただ美しい。三島由紀夫にしか書けない比喻があったりと、一文一文に酔いしれる感覚があるというか。なので、私が今、一文に自分の120%を賭けて濃いものにしたいという意識は、三島由紀夫への憧れがあると思います。



ご卒業後は？

一旦就職しなければと思って選んだのが広告代理店で、営業をしていました。すごくいい会社ではあったのですが、執筆の時間があまり取れず退職をして、その後、時間が取れて、しかも資料が沢山ある図書館を利用できる職場ということで、早稲田大学の事務員として働き始めました。その時にデビューできたという感じです。兼業を3年ほどやって、今は専業作家です。

兼業の3年間、お仕事と執筆をどう両立させていたのでしょうか。

小説を書けるのが帰宅後の夜か土日かという感じでしたが、大学の事務員になってからは就業時間の直

後に大学の図書館に行けるので、とてもありがたかったです。17 時に仕事が終わったら 17 時半から図書館、そこから 22 時までいるみたいな毎日でした(笑)。

蟬谷さんの作品のジャンルはどのような変遷だったのでしょうか。

最初は現代物でした。三島由紀夫の前に、夢枕獏先生の『陰陽師』や小野不由美先生の『十二国記』など、ちょっと特殊な環境のものが好きだったので、ファンタジーばい恋愛物でしたが、それは箸にも棒にも…で。それで大学の時に1度、歌舞伎の時代小説を書いたんです。私は時代物をいっぱい読んできたタイプではなく、時代物を執筆することのハードルの高さも感じていて、書き始めたもののまだ早かったなと一旦置きました。その頃からいろんな賞に応募して、ちょっとずつ最終候補に残るようになってきたのですが、そうすると「こう書いたら審査員にウけるんちゃうか」みたいな欲というか色気が出てしまって、迷走したこともありました。それで、自分の好きなものを好き放題に書いたらと思って。大学の時に書いていた歌舞伎の時代物をもう1回、自分なりに書き直したものがデビュー作の『化け者心中』でした。

主人公が見ている江戸の世界をそのまま映したい



『万両役者の扇』も、リズム感がよくて読みやすく、人々や街並みなど情景が立ち上がって来るようでした。インプットはどうされているのでしょうか。

最初に時代小説を書こうと思った時、書き方がわからなかったので卒論のゼミの先生であった早稲田大学の児玉竜一教授に「この当時の文体などを知るのであれば、何がいいんですかね？」みたいなことを、あたかも卒業論文を書く体で聞きました。あとで児玉先生と対談させてもらった時に、先生も「あれは薄々卒業論文への質問ではないことに気づいていた」みたいなことをおっしゃっておられました(笑)。その時に『浮世床』や、その当時の読本(よみほん)とか黄表紙を読んで、当時の話し方とかを

知るといいよ」というふうにおっしゃってくださったので、それらを読み込みました。それで、こんな感じかとインプットしつつ、ちゃんと読めるものにしなきゃいけないと思ったので、書く前は古典落語を聞いていました。それで語り口調を頭に入れて執筆しています。

そういう書き方だったんですね。文体のリズム感も五七五調だけではないですよ。ちょっと変拍子みたいなところもあって、それも面白かったです。

文体にはこだわりたいと思っているので、そう言っていただけて嬉しいです！ 私の場合は完全な一人称視点の小説ではありませんが、登場人物を一人決めて、その人の心の内を地の文でも書けるようにしたいなと思っていました。『万両役者の扇』で言うと、和菓子職人だと比喻はできるだけお菓子にするとか、そういうルールを課した部分は文体に関わってくると思いますね。



蟬谷さんには江戸時代の世界はどう見えているのでしょうか？

歌舞伎がもっと庶民に近い芸能であったというところが、私が江戸の歌舞伎の好きな部分で。私が選んだ江戸の文化文政時代は、上からの抑制を受けた後の跳ね返りの時代なので、庶民の力が強いというか、好き放題やっている部分もあって。それこそ歌舞伎役者も世間一般的に見れば河原者と虐げられています、蓋を開けてみたら千両稼いで、お上から追放されていたり、所払いされるといような、ちょっとちぐはぐな時代で、そこが面白いですね。江戸時代は人間の力がすごく出ていると思うので、自分で江戸時代を描くときは、主人公には世界がどんなふうに見えているのかということに大事にしたいなと思っています。どういうものを比喻で使うか、何に関心があって、何を切り捨てたらいいとか。その時代の知らない言葉が出てきても、私はできるかぎりそれを説明することはしたくはない。江戸時代を生きる主人公にしてみればそんなことはもうわかっている事柄なんだろうと思うんです。なので、そういう説明は極力なくして、その人が見ている江戸の世界を読者の人も見られるようにしよう。わからない言葉が出てきても、あえて第三者が「これこれはこういう意味です」みたいなことが

ない世界にしたいなと思っています。

文士劇での刺激と好きな歌舞伎俳優について

2024 年 11 月には 66 年ぶりに復活した文士劇、『なにげに文士劇 2024 旗揚げ公演』に錚々たる先輩作家とともに参加されました。どんな刺激がありましたか。

中学・高校で演劇をしていましたが、それまではずっと「歌舞伎役者はこういう気持ちなんだろうな」と自分で想像しながら書いていたので、いざ大人になって舞台に立ってみると見えない部分や細かい部分が見えて、得るものがすごくありました。今回の文士劇は先輩作家の方々が裏方も全部やっていらっしゃるって、資金繰りですとか、そういったリアルなお話も聞かせてもらいました。私が今まで書いてきたものは役者がメインだったので、裏側のリアルな部分を知るという貴重な経験もさせてもらったと思います。そして、今まで読者の一人として大ファンであった先輩作家が、動き回る姿を間近で見ることができたのは役得でした(笑)



歌舞伎のお話も少しいいですか。まず好きな歌舞伎俳優さんはどなたでしょうか？

玉様(坂東玉三郎)です。玉様がもう大好きです！ 最初に観たのが「金閣寺」でした。木に縛られた雪姫(玉三郎)が足のつま先で桜が散った地面にネズミの絵を描く場面があるのですが、その部分があまりにも美しくって！ 裾の中の見えない部分が見えた瞬間に、ぞくっとする色気を感じました。

上方歌舞伎の魅力は、どこに感じていらっしゃるでしょうか。

まず、言葉遣いがすごく特徴的なところですね。この演目は大阪弁じゃないとじっくりこないというか、濡れ事の部分は大阪弁の独特な感じが出ているなと思います。立ち役(男の役)も、大阪の歌舞伎は弱

い男の魅力みたいなものがあります。「つつ転ばし」とあるように、突いたら転んじゃうような人がもてはやされるといいますか。江戸の歌舞伎にも病にかかった人の魅力があるのですが、芯から弱いところも魅力に変えているところが大阪の歌舞伎の好きなところです。

大阪には何かそういう文化の土壌があるのでしょうか。

江戸は血筋がすごく大事ですが、大阪は芸養子で家をつないでいることも受け入れられているので、それこそ実の部分を取るというか、そこが大阪の歌舞伎の魅力だと思います。二項対立にするわけではありませんが、一方で江戸の歌舞伎は派手なものは派手にという煌びやかなところは素晴らしいなと思います。有名な演目でいうと「連獅子」は形や絵面の美しさがすごく出ていると思いますね。

どんな題材を選んでも中心にあるのは人間

では、目指す作家像や将来の目標などをお聞かせください。

誰かを目指すというよりか、自分しか書けないもの、自分の好きなものを書くこと。手を抜かず、一生自分の好きなものを200%で書くことです。次の作品は歌舞伎以外のことを書くのですが、歌舞伎は一生書いていくと思います。私は人間を書きたいという思いがすごく強いので、どんな題材を選んだとしても中心にあるのは人間です。あと、読んだ後に読者の価値観を何かしらひっくり返すことができるのも小説を書く意味だと思うので、そういうところもブレずに書いていくと思います。

蟬谷さんが贈る咲くやこの花賞は「大阪弁」

最後に、蟬谷さんが大阪に「咲くやこの花賞」を贈るとしたら、何に贈られますか？

やっぱり大阪弁ですね。大阪に生まれてよかったなって思います。小説でも大阪弁のキャラが出てくるだけで場面がパツと切り替わりますし、そのキャラをいかようにも転ばすことができるので、そういう意味でも大阪弁ってすごい武器やなって思います。私は東京にいる時は全然大阪弁が出なくて。それは中学校、高校でやっていた演劇の脚本が標準語だったので、標準語に慣れているのだと思います。普段は大阪出身の人間やとバレないぐらい東京の標準語を使っていますが、家族と話すときは大阪弁になるので、電車の中で「今、電話あかんねん」みたいなことを言うときは、ちょっと大きい声でいいがちです(笑)。魂は大阪に置いているんだろうなと自分では思います。

ふと口をついて出る大阪弁はありますか。

「アホか」ですね(笑)。大阪弁って悪口が多いんですよね。アホとか、スカタンとか、ボケとか。それをシチュエーションによって使い分けができるのは、大阪のすごくいい部分だなと思いますし、小説として

書いていても楽しいです。東京の人が聞いたらギョッとするかもしれませんが、アホとかスカタンは人間同士の関係性が築けているからこそ言えるものだと思います。



【略歴】 蟬谷めぐ実(せみたに めぐみ)

1992 年大阪府生まれ。早稲田大学文学部で演劇映像コースを専攻、文化文政期の歌舞伎をテーマに卒論を書く。2020 年『化け者心中』で第 11 回小説野性時代新人賞を受賞し、デビュー。2021 年に同作で第 10 回日本歴史時代作家協会賞新人賞、第 27 回中山義秀文学賞を受賞。2022 年に刊行した『おんなの女房』で第 10 回野村胡堂文学賞、第 44 回吉川英治文学新人賞を受賞。2024 年に刊行した『万両役者の扇』で第 15 回山田風太郎賞を受賞。他の作品に『化け者手本』などがある。